



株テクサー 代表取締役社長

朱強氏に聞く

IoT時代に最適と言われるLPWAという通信方式が世界の注目を集めている。世の中は超高速の5Gに向かって進んでいるが、一方で超低消費電力でワイドエリアをとらえるLPWAが、通信ネットワークにおけるもう一つの主役になると考える人は多い。

世界最大の調査会社であるIHS Markit社によれば、LPWAは2021年まで200%成長するといわれており、接続数は10億以上になると予想されているのだ。とりわけ中国におけるLPWAの普及は急加速している。

LPWAの新規格の1つである「ZETA」を推進するZETAアライアンスも拡大を続けており、19年4月19日には上海においてZETA Alliance China設立大会が盛大に開催される。今回はZETAの日本における総代理店となっている株テクサー（東京都港区芝2-15-19、03-6803-4317）の代表取締役社長である朱強氏に話を伺った。

— LPWAが注目を集めていますね。
朱 3G、4G、LTEなどの従来型無線通信に比べてLPWAは圧倒的に低消費電力であり、かつ通信費も安い。クラウドスタート、さらには

グローバルで同一ネットワークも特徴であり、実にすばらしい。中国のZETAが仕掛けるLPWA 2.0は、ここにきてかなりの評価を集めている。紙やフィルムなどに亜鉛物質を印刷して非常に薄く軽いバッテリーを作る技術を確立したからだ。ZETAを開発したZifisense社が先進的な電池技術を持つZinergyUK社と開発した通信モジュールだ。電池を含めて厚さはわずか3mm。量産化すれば価格は1個100円を切ってくるだろう。

上海でZETA大会開催へ LPWAでIoT新時代開く

本郵船グループの中国における100%子会社であるYusen Logisticsは、ZETAの開発会社であるZifisense社と戦略的な提携契約を3月26日に締結した。今回の提携はIoTプラットフォームの新しい時代を開くことを目指している。

Yusen Logisticsは国際航空・海上輸出入サービス・倉庫・陸上輸送サービス、プロジェクト物流サービス、サプライチェーンマネジメントなどを大きく扱っている。同社がZETAをしかけるZifisense社と提携することは、いわば中国における物流革命が起きることだといっている。

— 4月19日にZETA China Alliance 設立大会が開催されますね。
朱 上海のホテルでほぼ一日をかけて開催されるもので、いわば本格的なキックオフが始まったことを意味する。

— たしかに通信モジュールを開発したことは大きいですね。
朱 世界はエッジコンピューティングの時代を迎えているが、このモジュールはまさに先駆者ともいえる存在となるだろう。薄くて軽いわけであるから、どんなものにも付けられる。例えば船舶空機、自動車、さらにはコンテナ、病院など、多くのモノに取り付けることで通信革命を引き起こすだろう。故障の検出や温度管理、さらにはセキュリティ管理もできるだろう。ハードデバイスが車の温度を監視したり、ワインの温度を管理したり、配達品の位置を示唆したり様々なことができる。夢のような社会はまさにそこまで来ている。

— テクサーはZETAの日本総代理店です。
朱 一方で中国における日本の総代理店とも位置づけられる。つまり日中のかかわりをしているわけであり、輸出入をすべて握っている。日本から発信し、タイ、シンガポールなど東南アジアも攻略していく。その後にはヨーロッパ、アメリカなどにも拡大を進める。しかし大切なことは、このビジネスのプラットフォームをまずは日中で固めることなのだ。

— IoTの社会が一気に広がる開発ですね。
朱 そのとおりだ。印刷回路であればフレキシブルであり、折り曲げることまでできる。そしてまたローコストであるからあらゆるモノに取り付けることができる。

— IoTに注目した日

— 4月19日にZETA China Alliance 設立大会が開催されますね。
朱 上海のホテルでほぼ一日をかけて開催されるもので、いわば本格的なキックオフが始まったことを意味する。

— たしかに通信モジュールを開発したことは大きいですね。
朱 世界はエッジコンピューティングの時代を迎えているが、このモジュールはまさに先駆者ともいえる存在となるだろう。薄くて軽いわけであるから、どんなものにも付けられる。例えば船舶空機、自動車、さらにはコンテナ、病院など、多くのモノに取り付けることで通信革命を引き起こすだろう。故障の検出や温度管理、さらにはセキュリティ管理もできるだろう。ハードデバイスが車の温度を監視したり、ワインの温度を管理したり、配達品の位置を示唆したり様々なことができる。夢のような社会はまさにここまで来ている。

（聞き手・特別編集委員 泉谷沙）